小学生における読書が共感喚起と思いやり行動に及ぼす影響
ー共感の組織的モデルからの検討ー

A Study of Influences of Reading Books on Sympathy and Prosocial Behavior in Elementary School Children: From the Perspective of Davis' Theory

児童学研究科　児童学専攻　1000-080617　新田円佳

問題と目的

従来から読書は、教育現場や家庭において、共感や向社会的行動（思いやり行動）の形成を促す効果が期待されている。しかし、読書には本当にそうした効果があるのだろうか。

Hoffman（1975,1982）は、読書のように、その場に直接いない他者の苦痛を想像し、共感的苦痛を喚起し、向社会的行動や思いやりの気持ちが生じるには、高度な認知処理である役割取得が必要だとしている。さらに、Davis（1994）は、個人の特性としての共感（特性共感）から、共感的苦痛などの喚起（状態共感）、そして、思いやり行動への動機づけ（思いやり行動傾向）に至る包括的な心理的メカニズムとして、①見る側・相手・状況の特質である「先行条件（特性共感）」、②共感的な結果が生み出される認知の程度（単純：自動的共感、高度：役割取得）による「過程（共感喚起過程）」、③見る側の者の中に生じる感情的・認知的反応としての「個人内的結果（感情的・非感情的結果）」、④相手に向けられる行動的反応としての「対人的結果（思いやり行動傾向など）」の４つの要因から構成される「共感の組織的モデル」を提唱している。これに従えば、読書による状態共感の喚起、その結果として、思いやり行動に至るには、役割取得を含めた内的プロセスが関与することが予想される。

しかし、読書が共感や思いやり行動に及ぼす影響を実証的に検討した研究はきわめて少なく、また、その心理的メカニズムをDavisの「共感の組織的モデル」から検討した研究はない。

そこで、本研究は、実際に読書が特性共感や思いやり行動傾向の形成に影響を及ぼすのか、もし影響を与えている場合、Davisの「共感の組織的モデル」で仮定される諸要因の関連性が読書過程によっても生じるのかを、小学生を対象に調査と実験を通して明らかにすることを目的とした。

予備調査

後の調査・実験で使用する測定尺度の構成、及び、読書材料を選定するため、女子大生185名を対象に予備調査を行った。対象者には、小学生用の道徳の副読本などから「共感的苦痛」の描写を基準に選んだ6作品のいずれかを読ませ、先行研究に基づき作成したDavisの「共感の組織的モデル」の「個人内的結果」に対応する各尺度に回答させた。その結果、各尺度の因子構造と信頼性が確認され、また、それらの評定結果から、相対的に、共感的苦痛の描写が強い、弱い、無い、に対応した作品をそれぞれ１つずつ選定した。

また、各作品が共感的苦痛や思いやり行動に適した「思いやり」をテーマに扱っているかを小学生の副読本の中で扱われているテーマを参考に10個の選択肢から3つ選択させた結果、共感的苦痛の描写がある作品は全て「思いやり」が最も多く選択され、「思いやり」をテーマにした作品であるといえた。さらに、作品の適正学年を選択させた結果から、実験の対象とする小学5、6年生に適切な内容であると判断された。

研究Ｉ（調査研究）

研究Ｉでは、小学生の日常的な読書活動を把握し、その上で、読書が特性共感や思いやり行動傾向の形成に影響を与えるのか、また、読書中にDavisの「共感の組織的モデル」から想定される諸要因がどのように経験されているのかについて探索的に検討した。

小学4年生107名（男子50名、女子57名）、5年生124名（男子66名、女子58名）、6年生102名（男子58名、女子44名）、計333名を対象に、読書習慣・経験（読書時間、読書量、よく読む本の種類、読書動機等）の質問、及び、予備調査と先行研究に基づいて作成した特性共感、思いやり行動傾向、状態共感（共感喚起過程、感情的結果、非感情的結果）の各尺度からなる質問紙を実施した。

その結果、次のことが明らかになった。まず、小学生の読書活動については、読書時間は、6年生が4、5年生よりも有意に少なく、学年にかかわらず女子が男子よりも有意に多かった。読書量は、5、6年生が4年生よりも有意に少なかった。先行研究と同様の結果であり、読書時間・量における学年・性差は固定化している。よく読む本の種類では、全体ではファンタジーが一番多く選択されたが、男女ごとでは種類が異なっており、好みに性差があった。読書動機では、「おもしろいから」のような内発的な動機が多く、「先生や親にほめられるから」のような外発的な動機が少なかった。子ども達にとって読書が、自発的な活動であるといえた。

次に、特性共感、思いやり行動傾向、状態共感の各尺度の因子構造と信頼性を確認した

うえで、読書活動と特性共感、思いやり行動傾向との関連を分析した結果、全体的な傾向として、読書量よりも、読書時間が特性共感や思いやり行動傾向に影響すること、読書時間が多いほど、特性共感や思いやり行動傾向は高いということがいえた。従来の読書調査では、読書時間との関係は扱っておらず、新たな知見を示した。また、よく読む本の種類や読書動機の種類も、特性共感や思いやり行動傾向に影響するといえた。

また、状態共感については、学年、性別にかかわらず、総じて、Davis の「共感の組織的モデル」が仮定する「先行条件（特性共感）」「過程（共感喚起過程）」「個人内的結果（感情的・非感情的結果）」「対人的結果（思いやり行動傾向）」の諸要因の相互に強い関連性がみられた。このことから、小学生の読書活動においても、状態共感の喚起が経験され、それが思いやり行動傾向を高める可能性があることが示唆された。

研究Ⅱ（実験研究）

研究Ⅱでは、共感的苦痛を引き起こしやすい読書材料を読むことによって状態共感が喚起され、思いやり行動傾向を促進させるのか、また、読書過程でも Davis の「共感の組織的モデル」が仮定する「先行条件」「過程」「個人内的結果」の諸要因の関連性が見られるのかについて実験的に検討した。

小学 5 年生 155 名（男子 78 名、女子 72 名、不明 5 名）、6 年生 139 名（男子 63 名、女子 69 名、不明 7 名）、計 294 名を対象に、予備調査に基づき共感的苦痛の表現の程度を操作した読書材料のうち、共感的苦痛が強く描写された読書材料を読む条件（苦痛材料 a 群）、共感的苦痛が弱く描写された苦痛材料を読む条件（苦痛材料 b 群）、共感的苦痛の描写が無い中性材料を読む条件（中性材料群）、及び、読書材料を読まない条件（統制群）を設け、それぞれに割当てた。　思いやり行動傾向の変化をみるために、いずれの群においても、実験前の特性共感と思いやり行動傾向、読書直後（統制群は同時期）の思いやり行動傾向、一か月後の思いやり行動傾向を測定した。また、読書過程における Davis の「共感の組織的モデル」の諸要因の関連性をみるために、読書材料を読む 3 つ実験群においては、読書直後に諸要因に対応した諸尺度に回答させた。さらに、読書材料の内容理解を確かめる課題を実施した。以上に基づき、各群の読書前後での思いやり行動傾向の変化、読書過程における「共感の組織的モデル」の諸要因の関連性について分析した。

その結果、まず、いずれの群も読書前後で思いやり行動傾向に変化はなく、統制群と同じであった。このことから、一回の読書では、思いやり行動傾向を促進するには至らないことが示唆された。

次に、読書による思いやり行動傾向の変化は3つの実験群で差は見られなかったが、「共感の組織的モデル」の諸要因の関連性を見た結果、各群の状態共感に次のような異なる様相がみられた。①苦痛材料a群では、特性共感が役割取得を喚起させ、役割取得の働きにより感情的・非感情的結果が喚起された。主人公の苦しみが実験対象者にとって非日常的な内容であったため、他者視点的な役割取得だけが「個人内的結果」と結びついたと考えられる。②苦痛材料b群では、特性共感が役割取得と自動的共感を喚起させ、両者の働きにより感情的結果が喚起し、また、役割取得の働きにより非感情的結果が喚起した。主人公の苦しみが実験対象者にとって日常的な内容であったため、個人的感情を喚起させやすい自動的共感も働き、感情的結果と結びついたと考えられる。③中性材料群では、役割取得は喚起したが、「個人内的結果」とは結びつかなかった。これは苦痛描写が無かったためと考えられる。このような各読書材料でのプロセスの違いは、予備調査で確認された各読書材料の「個人内的結果」の違いを説明できるものであった。

このことから、読書材料の共感的苦痛の描写に応じた、諸要因相互の関連性がみられ、特に、「過程」における役割取得が、「個人内的結果」に重要な役割を果たすことが明らかになった。

総括

研究Ⅰと研究Ⅱの結果から、日常的な読書経験のうち、特に読書時間が特性共感、思いやり行動傾向の形成に影響するが、1回の読書では、状態共感を喚起することはできても、思いやり行動傾向の促進には至らないことが明らかになった。また、Davisの「共感の組織的モデル」が仮定する諸要因の働き方は、読書材料の内容を反映し、異なる様相が見られることが明らかになった。このことから、読書によって特性共感や思いやり行動傾向を促進するためには、共感的苦痛を喚起するような読書材料に、連続的に長期にわたって触れることやその習慣を身につけることが必要と考えられる。

また、研究Ⅱでは、読書材料の間で、Davis の「共感の組織的モデル」が仮定する諸要因で異なる働き方が見られたが、その主な要因は、役割取得であると推測され、Hoffman の「読書によって共感的苦痛を喚起するには、高度な認知処理である役割取得が必要である」という仮説を支持するものであった。このことから、思いやり行動傾向を読書で促進させる前提として、感性に訴えるだけではなく、役割取得を含めた知的側面を育成することも必要であるといえる。